



アラン

ーノルマンディー  
人のプロポIV  
【2013年11月号】

翻訳：高村昌憲

- 六十一 宗教の力 (FORCE DES RELIGIONS)
- 六十二 統合された党派 (PARTIS UNIFIÉS)
- 六十三 三つの時代 (LES TROIS ÂGES)
- 六十四 軍団 (LA PHALANGE)
- 六十五 政治家と比例代表制 (POLITICIENS ET R.P.)
- 六十六 経済学 (ÉCONOMIQUE)
- 六十七 坑夫たちのストライキ (GRÈVE DE MINEURS)
- 六十八 戦争のための豊かさ (LES RICHES POUR LA GUERRE)
- 六十九 株主たちのストライキ (GRÈVE D'ACTIONNAIRES)
- 七十 株主は語る (L'ACTIONNAIRE PARLE)
- 七十一 モルモン教徒 (MORMON)
- 七十二 同盟 (LIGUES)
- 七十三 戦争 (LA GUERRE)
- 七十四 ドイツからの帰還 (RETOUR D'ALLEMAGNE)
- 七十五 作家たち (ÉCRIVAINS)
- 七十六 四月の耕作 (LABOUR D'AVRIL)
- 七十七 復活祭の鐘の音 (LES CLOCHES DE PÂQUES)
- 七十八 演劇 (DRAMES)
- 七十九 権力者の友人 (L'AMI DU POUVOIR)
- 八十 英雄崇拜 (LE CULTE DES HÉROS)
- 八十一 人民の友人たち (AMIS DU PEUPLE)
- 八十二 ポスター (AFFICHES)
- 八十三 ジャン=ジャック・ルソー (JEAN-JACQUES)
- 八十四 天使でも獣でもない (NI ANGES NI BÊTES)
- 八十五 陪審員たち (JURÉS)
- 八十六 社会主義者は答える (LE SOCIALISTE RÉPOND)
- 八十七 選挙投票 (LE VOTE)
- 八十八 信条 (DOGMES)
- 八十九 信者たち (CROYANTS)
- 九十 信仰について (SUR LA CROYANCE)

### 六十一 宗教の力 (FORCE DES RELIGIONS)

宗教は長く生きてきましたし、多分これからも長く生きるでしょうが、その力については共通の真実があり、狂気の種子を閉じ込める独特なものの全てがあるとされています。良識は、宗教を超えた上善になります。それは新しい物に抵抗します。哲学者たちにおいてはどの位奇妙な説があったのでしょうか、と大変良く言われて来ました。しかし、宗教と同じ様に残っているのでしょうか。多くの思想が頑強であるのは確かであり、全てが大変に古く、何時も人間の裡に共通して考えられておりますが、漠然としています。かくして法律という観念が生まれます。それは呪詛であり、呪いの言葉であり、ずっと暴君がおります。それは熱狂でもあり、何かの希望でもあります。人々は死者の傍に別の正義を探しに行きました。しかし、それは煙のようなものでもあります。情熱と理性が混じり合ったようなものです。王のテーブルには何時も詭弁家が就いています。それらの言葉そのものが宮廷人的です。彼らの議論にもまだ暴君がおります。その法律と権力に沿って、誰がジャン＝ジャック・ルソーよりも遠くへ行くのでしょうか。そして良識の閃光が、頁の上に輝いています。三行で書かれたパスカルのパラドックスは二世紀を越えて寓話書が書かれ、私たちの雑然と積み上げられた観念の上に、砲弾のように落下して来ます。「正義を強めることも出来ずに権力は正当化されて来ましたし、それは平和であるからでした。というのもそれは良く至上のものであるからです」。このようにして愛は熱狂になり、愛するものを殺します。思想は大変に良く眩惑し、明瞭にせず、燃やして仕舞います。しかし、才能のある者たちは大変活発に松明を持ち続け、もっと暗い夜を生んでいます。

人々は天体の動きを解明しました。この驚くべき仕事には何世紀もの協力が要求され、そのために中国の古文書が度々私たちの役に立ち、つまらない真理と同時に衝撃的な間違いをその儘にした天才は決しておりません。今日では、黄経局年鑑は常識的な愛読書になっております。力学、物理学、化学は公会議や破門によって生まれますが、逆説がない訳ではなく、せっかちな見方はしません。情熱は至る所にあります。しかしながら、私たちはここで経験しているのであり、幻想を立て直し、産業を渴望する者が真実に報いるのです。

権利が重要になるや否や、渴望は間違ったものにお金を出し、経験が不足して来ます。しかしながら私たちは、権利が大空の天体よりももっと確実な思想に引きつけられるのを良く感受しています。少なくとも情熱はここで真実の雲を生みます。社会主義者は正義の思想を持っています。しかし、彼は怒りによって拳を握ります。観念を押し潰し、自分の拳を崇めます。そこには労働組合運動がありますが、それは力のためです。彼は同じ情熱によって、明日には君主制擁護者にもなります。そして権利とは、雲の端に別の星があるように、発見されるのを期待するものです。

それ故にソクラテスは、砂の上に幾何学を現したいと思った時、一団の中から奴隷の子供を一

人選んで、彼の素朴な考えを自分の思想の規範と見倣しました。真実というものは良識です。美というものも同じです。ユゴーは全ての人々のために書きました。ベートーヴェンも全ての人々のために歌いました。彼らの声を大きくするのは人間の宿命です。しかし、その宿命を良く聞くためには恐らく、他の騒音には耳を塞いでいなければならないのです。

(一九一二年二月十八日)

## 六十二 統合された党派 (PARTIS UNIFIÉS)

比例代表制という選挙制度で最も自然な結果の一つが今、大変明瞭に認められます。それは党派が統合されるようになるということです。そこでは違いが強調されなければならないこと、そして推移に鈍感になることで両極端になった隣人同士を急進主義者として結びつけるために、沢山の微妙な差異を犠牲にしなければならないことを理解して下さい。ところで私としては、これらの微妙な差異や多様性を愛していますし、それらには活気があって自分で思考している国民の印のようなものです。多様でなく単一であることは、貧しいことであると私には見えます。何故でしょうか。有権者は良く考えて判断が出来るようになります。でも進歩的な博士たちに見るような決して高度な政治ではありません。しかし、博士たちは地方や個々の関心については良く知っています。彼らが選んだ人間の性格や、下院に悪い雰囲気を生じるかもしれない変化についても良く知っていて、私は仲間意識、党派心、ボスによる独裁、パリの皮肉を耳にします。結局のところ、もしもお金持ちになっても、その財産の出所について良く知っており、両親、友人、選挙協力者に施す特別待遇についても博士たちは良く知っております。地方は、パリの人々が少なくとも嫌疑をかけない遵守能力をもつて分析し押し測ることが全てです。長々と議論され熟考された彼らの判断力は、愚か者や野心家や泥だらけの悪戯っ子であればある程、発揮され投げ込まれました。その代わりに組織された党派は、あらゆる間違いを大目に見ますが、党派に対する反乱は別です。

共和国は、特に何処にもないと私には思える自然に生まれた計画に従って大きくなり、だんだんと強くなって行きますが、党派の戦いが力による征服を目的と見倣すと理解されているベルギーやイギリスやドイツに倣って、一種のクーデターによって現代の私たちを教育することは合理的で正しいのでしょうか。そこには変わる事のない戦争による政体があり、そこでの兵隊たちは軍服を着て命令で歩かなければなりません。議論は殆ど如何なる評価にもならないというのが彼らの言い分です。そこでは不在者投票も支障がありません。長たちは繰り返して言うことしか知らないからです。「団結しよう。そして勝利は我々のものだ」。軍隊制度や本当の軍国主義の軍人は、自らの判断を犠牲にして隊長に自ら与えるのは、彼の力を大きくするためでもあります

。事物の力による貴族制度でもあります。というのも思考したり判断するのは隊長に任せているからです。その制度は型通りの思想で一杯で、組織の方針が良識の代わりになっています。結局のところ、そこでの有権者は軍人精神に従った力が要求され、規律によった判断を自分に与えています。国家における専制政治的な状態が幾つかあるのを除けば、彼の働きは専制政治のもので、それは政治家たちには気に入られていますし、彼らはその時全体を動かしています。しかし、市民は最早二つか三つの宗教のうちとか、二人か三人の大御所のうちから選ぶしかありません。そして人民の良識という庭は、これらの封建制度の戦争によって略奪されているのです。

(一九一二年二月二日)

### 六十三 三つの時代 (LES TROIS ÂGES)

大地を掘ると、構成や構造や年代が非常に違う地層が発見されます。最も古い地層は一般に別の地層を押し上げています。しかし、ひっくり返り、逆になり、混合し、すり潰されていることも屢々あります。人間の感情も地層のようなもので、一方と他方がお互いに関係していて、噴出や変動がなくもありません。私は三つの時代を考察しました。

愛の時代である幼年時代があります。そこには親との関係があり、私とあなたの区別がありません。私のものとあなたのものとの区別もありません。今、分かっている最も原始的種属は、このような感覚で生活しており、私たちにとっても極めて謎です。人間は家族によって一つに纏まっていますが、各家族の中には人間、動物、雨、風というものが少しはあります。そして或る人々が言うには鸚鵡であり、他の人々が言うには野牛であり、雲や雨であるとも言います。彼らは儀式や魔法が証明するが如く大変に熱心です。しかしそれは最も狭い親戚関係でしかなく、そのように親と子の関係が一般化して行きます。子供が話をするのは先ず母親です。未開人たちは生き生きとそのことを感じています。息子は父親になります。決して死者たちはおりません。死者たちは、息子が父親になるように生きています。息子が病気になると、父親も良く手当てを受けます。自己は区別されません。それは共産主義の時代になります。それを注意して見るのは良いことです、何故なら人は決してそれを考えないし、今日でも家族というものは共産主義の中で生活しているからです。そして父親は、神の時代にいるのです。

青春がありますが、それは恐れと熱狂の時代であり、一言で言うなら戦争の時代です。ここで主に精神を占めているものは共通した防御の関係であり、事物や動物に対峙することであり、人間にも対峙することです。それは服従と感嘆と野心の時代でもあります。何人もの英雄がいて、彼らは力や喝采によって見分けられ、既に取り憑いています。ヘラクレスは、彼以外の者では使用出来ないという理由から自分の棍棒を自由に出来ます。武器や道具というものはそういうもの

です。しかしこの所有権は、少なくとも仕事が出来ることに基づいています。それは集散主義の時代です。戦争のあらゆる武器は、集散主義に従って生かされます。神はその時、主人になります。

成熟した壮年期がありますが、それは平和の時代です。ここで支配し関係しているものは、交換とか取引です。多くの蓄積、値切りの隠蔽、二重の罫、売手の策略、そして買手の知恵があります。それと共に誠実さもありません。というのも契約は尊重されるからです。それは個人の所有と公平の時代です。平等は権利の中にあり、同時に不平等は利潤の中に現れます。力は軽視されます。何故なら平和や市場を混乱させるからです。一人ひとりが〈自分〉と言い、こっそりとお金を勘定します。知識人が支配し、弁護士が管理します。割引にはカレンダーが必要ですし、天文学者たちにもお金を支払います。実際的なものが均衡を保ち、お守りや物神は軽視します。軍人がお上になります。持参金は愛する男に支払います。楽園が実行に移されます。神が判事です。神には弁護士がおり、棒を持った守衛もおり、彼らは身をきれいにされて番人になっています。

(一九一二年二月二八日)

#### 六十四 軍団 (LA PHALANGE)

私は、自惚れの強い政治家たちが好きではありません。彼らは空気のように軽く、全てが成り行き任せです。誰が彼らを守るのでしょうか。幸いなことに、その様な人は、私たちの中にはめったにおりません。権力への道にはせいぜい一人か二人いるぐらいです。私は政治的な文学世界の流れや渦の中で漂っている十人ぐらいの人を知っています。彼らは観念を貪り食う人々です。表面上は何かそれらしい合理的な意見が目立つようになると、直ぐに彼らは口を開いて飛び掛かり、餌と釣り針を飲み込み、突然に喉には釣り糸があります。彼らの消化力は驚異的です。何時も新たなものに改宗し、何時も熱愛したものを消費し、何時も何かの転向者になり、何時も率直さと知的実直さをあなたの眼の前に投げつけます。人が彼らに驚きを示して殆ど軽蔑を示す時、彼らは言います、「人は誠実な人を欺くことが出来ないだろうか。間違いを見付けること、先入観を解くこと、軽率な約束を破ること、結局のところ自由を主張することは立派なことではないだろうか」。

私は、漂流して成り行き任せの様な、この様な精神を愛しません。彼らは偉大な読書家で、気が弱く、新しいことが好きなのです。彼らの心の底は、村に到着してどんな話にも〈あゝ！〉と驚きの声を上げる人々のような観念に賛成しています。彼らに欠けているのは何でしょうか。多分、それはまさしくしっかりした教育が齎す精神の公平さであり、柔軟さです。変わり易い不

安定な精神は、強情な精神です。彼らは主義を持つことを知りませんし、他者を理解すること、力や真実を見抜いたり把握したりすることを知りません。何とか飛び立たなければなりません。彼らは生まれつき自由な思索家です。彼らはアナキストになります。十年後にはカトリック教徒で、洗礼を施される彼らに、あなたは再会します。彼らは決してカトリック教のことを考えていませんでした。彼らは一纏めにして再び拒絶して投げ出します。将来に彼ら本来の思想に退屈し、飽きて、主任司祭の巧みな議論に捕まって仕舞う彼らは、私が言ったように餌や釣り針や釣り糸をその儘全て鵜呑みにします。

私は、重く濃厚な精神を愛します。少なくとも肉体的な重さを言っているのではなく、太った牛の性質に含まれるようなものです。しかし中身が一杯詰まった精神そのものであっても、感情や偏見や習慣を引きずっているのが精神です。罌の周りを回るように議論を繰り返すのが精神です。自然は根を張りますし、そこでも思想は回りに根を張ります。本当の文化は何にでも貢献しますし、その感情が決定し形づくられるのは大作家や異教徒やキリスト教徒たちによるのであり、彼らは人間味のある体験というものをあなたに委ねます。多くの敵から防衛するための城砦には出口が幾つか造られます。敵の武器も手に入れて、自分たちの防衛に利用します。厚みのある精神は、防衛戦によって広がります。慎重に前進しますが、殆ど後退しません。自分たちの過去であり、過去の全てを取り出します。自分たちの利益、偏見、情熱の全てが動き、彼らに示される本当の思想や、彼らに刺激を与える矢に従って、少しばかり組織化されます。急進主義は、これらの昔からの集団によって強くなります。貴族主義者、アナキスト、気まぐれな人、何でも鵜呑みにする人たちの軽々とした軍隊は、軍団の回りで空しくぶんぶん言っています。

(一九一二年三月二日)

## 六十五 政治家と比例代表制 (POLITICIENS ET R.P.)

政治家たちが政治を大変に間違っ理解するのは自然であり避けられません。もしも彼らが、何か変な野心を少しも持っていなかったなら、政治には手を出していないと先ず言わねばなりません。この種子は権力を行使することによって発達します。彼らは自分たちの友人に報いたり、敵を罰して大きな喜びを見出します。それ故に彼らは大臣の周りを回って窺います。あるいはもしも彼らの党派に力がなかったなら、脅して攻撃します。このゲームに熱中します。そんな風に彼らは直ぐに党派の闘争は政治の基本であり、理想の政治は党派の完全な調査に支えられていると考えるようになります。そして彼らは、戦いの正義が本当の正義であると見做します。

有権者は本能的に何に対しても抵抗しますし、だんだんと徐々に抵抗します。というのも投票箱に投票用紙を入れる時、有権者が求めているのは戦いの喜びではないからです。自分の党派を

勝利の後に略奪させるために勝たせようとするのを信じることは、或る選挙運動員たちによれば、選挙の大衆を余りに軽く考えているのです。

それでは有権者は何を望んでいるのでしょうか。第一には平和を望んでいます。そしてもしも可能なら、次は減税です。少なくとも厳正な経済です。同様に、思想の自由と信仰の自由です。結局のところ権力の濫用には全て反対して投票します。良く見てから権力に反対し、市民の自由のために投票します。もしも色々な党派の有権者を良く調べたなら、彼らは殆ど全ての人々が同じことを望んでいるのが分かるだろう、と私は信じています。従って政策の違いも、多くはお互いに似ています。

何に基づいて党派は分かれているのでしょうか。第一には方法による効果です。次のような質問に基づいて投票するか否かです。「あなたはもっと公平な税を、つまり一人ひとりの実際の財産に基づいたより良い規則を望むのでしょうか」。大衆は「はい」と答えます。しかし大衆に言われるや否や、大きな財産が外国へ逃げて行くのが良く分かります。その上、その反動で貧しい人々は、自分たちの分け前分以上を何時も支払います。そのようにして収入についての取り調べはそれ自体が嫌らしいことですが、公平に向かったの如何なる進歩も実現されません。その時は躊躇する時であり、基本的な点では決心出来ずに信頼が置ける人々の中から選びます。そこから不一致や戦いが生じます。一方はお金持ちに生まれた人を選びます、何故なら彼を清廉潔白と思うからです。しかし、他方では高慢な独裁者を恐れて貧しくて単純な人を選びます。一方の人々は上手に話をする人が好きであり、他方の人々は仕事を巧みに熟す人が好きです。要するに、私たちは人物を選ぶのであって、主義ではないのです。支配者ではなくて、支配者に抵抗することが出来る人物を選ぶのです。これらの理屈全てから生まれるのは、郡選挙の投票は有権者には好かれますが、統率力を持つ首領からは嫌われるということです。

(一九一二年三月四日)

## 六十六 経済学 (ÉCONOMIQUE)

私たちが生活する経済機構において最も驚くべきことは、全てが隠されていることです。そして何よりも都市では、あらゆる製品が値札を付けてショー・ウィンドーに陳列されていますが、それらが何処から来て、誰が作り、労働者がどの位の賃金を貰っていたのか、を購入者は知ることがありません。値札には説明責任がなく、独裁政治の命令のようなものです。お金の力は命令と同じです。幾らかの纏まったお金があれば、自然の法則のようにあなたは欲しい物を手に入れます。しかし、それは実際には良く出来た魔法です。というのも一組の履物と一枚の小さな金貨に、如何なる関係があるのでしょうか。

子供に桃源郷が語られる時、そこにはミルクの河やチョコレートの岩があり、あるいは更にもっと見てみるなら仙女の国であり、そこでは魔法使いの鞭が西洋南瓜を祝祭用馬車に変えますが、誰もそれを信じませんし、子供たちさえ信じません。何故なら私たちは、これらの物が何処で起こり、如何に行われたのか理解していないからです。しかし、お金はこれらの奇跡をたちどころに起こします。それ故に、いくら良く考えて見たいと思っても、お金は何時も物神です。それは積極的な精神にとっての神です。というのもお金は決して裏切らないし、絶えず奇跡を生むからです。従ってけちな人は、宗教と共通した多くの関係があっても私は驚きません。

お金の力には何時も驚かされます。何故なら、その力は他のものと少しも似ていませんし、少なくとも一寸した発条であると分かるからです。今、それらの発条は隠されています。あるいは寧ろ上手に発見されます。というのも、それらは何時も生産者であり、守衛であり、販売人であり、彼らの一人ひとりが出来る限り最も稼ごうと努力するからです。しかし、これらの様々な人間、一人ひとりの違った性格、移り気で我が儘な感情が、自動で販売する機械のように規則正しく平等化することを見出します。あなたは二スーを入れます。密閉された大箱の中で、或る品物が動きます。その品物はあなたの手落ちるのです。そんな風にして人は物を買います。もしも不労所得の年金が貰えれば、そして株式欄相場の価格を目で追うことが出来れば、なお良いのでしょう。これらのことは驚く程に規制されているので、疑って考えることはありません。

同じメカニズムによって労働は、台無しにされているようなものです。人は舗装工たちを理解しますが、彼らは道路を元の通りに直すことだけを行います。彼らの思想を、自分の家の前の中庭に砂利を敷く人間の思想と比べてみて下さい。中庭が完成に近づいていることを彼は理解します。彼はそれを既に楽しんでます。しかし、舗装工は自分の人生を乱れた舗石の中で過ごします。舗石がきれいに復旧するや否や、彼は他の所へ行きます。他の乱れた舗石の所です。彼が働くのは、舗装するためではなくてお金のためです。彼の胃袋が殆どそれを引き合うのであり、決して思想ではありません。というのも彼の労働は終わりが無く、ペネロペ(1)のように何時も繰り返しているのです。それ故に労働には喜びがありません。従って、お金持ちの無関心と貧乏人の不快感は、同じ原因が齎しています。愛というものはお金に味方して、自然の掟や友情の規範を人は忘れます。

(一九一二年三月七日)

(1) ペネロペは、ギリシア神話のユリシーズの貞淑な妻である。夫がトロイア遠征で留守の間、何人もの求婚者が現れたが、二十年間夫が帰るまで貞節を守った。何時までも終わらないことを表す。

私たちは多少なりとも、この坑夫たちのストライキを容認します。だがその上更に、彼らが拒絶している不公平には全面的に協力します。当初その議論は、株主と坑夫の間で行われていたように見えました。ところが株主がニースで冬を過ごし、ノルウェーで夏を過ごし、秋には狩をして、春にはお祭りで過ごしているのが想像されるのに対して、その間の坑夫は地下何百メートルの処に、時として海の下にもいるのであり、骨を折って株主の快樂を生み出してやっています。そんなことを考えると、そして良く考えてみたいと思うと、反乱を起こしたい気持ちになります。正義は大変に明確な言葉を語ります。しかし、一人ひとりが自分だけの行動、心遣い、毎日の暗黙の同意を考えることも、同様に必要がないことではありません。

何故なら、私たちは浪費家というものでもあるからです。私たちは労働によって生産した物を大事にしません。その労働を忘れています。表面的な浅薄な教育が今は全ての人々を騙しています。機械の普及や伝達、町から町へ、国から国へ浪費し得る物や人間の異常な活動に私たちはびっくりさせられます。この変化活動の避けられない結果は、労働する人間が増加していくことであるとは理解されていません。地方の人口減少は、労働が一日一日だんだんと骨が折れて、急がされ、昔よりも自由でなくなることを意味しています。

子供はパン一切れの歴史を知ります。彼はそこに農民の労働を思い出します。一塊の石炭の歴史も知ります。そこに坑夫の鶴嘴が振り下ろされるのを思い出します。でも何でしょうか。子供は自問します。パンや石炭は必要です。それは本当です。しかし、はっきりと語らなければならないことは、急行列車や電車や電話や、いわば贅沢な移動というものは生活の摩擦を滑らかにしているように見えますが、工場や坑夫の労働を二倍にします。私たちの最も劣った行動とは、石炭の無駄使いのようです。私は市内電車に乗ります。私を連れて行ってくれるのは石炭です。私を連れて行ってくれるのは坑夫です。もしも私が足で歩いて行ったなら、坑夫の仕事は絶対にもっと少なくなります。私は十台の客車のうちの一台に乗ります。私が乗り込む車室は八室のうちの一室だけです。私は自分の時間を選択します。待ちたくはありません。唯一の客車に乗るのに同意したなら、私はその中の一つの座席しか取れませんし、その電車は速いものではなく、何時も良く止まります。坑夫の労苦も少なくて済みます。私は、今日は、とか、今晚わ、と言うために電話を掛けます。あるいは三行書く代わりに電話を掛けます。報いてくれるのは何時も坑夫です。というのも金属になるものは全て石炭を消費するからです。私はパンを無駄にしません。石炭は空中に投げて無駄にしてしまいます。しかしながら耕す人や、種を蒔く人や、収穫する人の労働とは、坑夫の労働と比べてみて、何でしょうか。もしもこのストライキで私たちの足とか我慢強さによって、走ることが少しでも強制されるなら、このストライキは正義でしかなくなります。私たちは調停者ではなく、加担者なのです。

(一九一二年三月十日)

## 六十八 戦争のための豊かさ (LES RICHES POUR LA GUERRE)

戦争についての判断を、全て正義に基づいた他の一般的な判断と一致させるのは難しいことです。或る経済的理想とか、少なくとも労働者たちの極めて明白な権利が危険にさらされるや否や、冷酷で閉鎖的な人間になり、一致させることが何もない頑固者になります。まるで彼らの豊かさや贅沢、暇な時間や優雅さがそこから生まれ、まさしく幸福でしたが、それらのない人生は彼らにとって可能でなくなっているかのようです。この冷酷な決心は、特に最も下らない女たちに見られます。彼女らは、皮を歯で食いしばっているブルドックの番犬のように、自分たちの特権にしがみついています。イギリスの鉱山所有者たちも、同じ種類の頑固さを見せています。そして、それ故に社会主義者たちは金持ち階級のエゴイズムを罵り、良識を論拠とした公平を手に入れることをすっかり断念しています。

彼らも同じ市民であり、信じることに基づいて自分たちのお金で動きが大変に重くなっていて、金庫には大変しっかりと錨が止められて、戦争になりそうだと語られると、風向きや潮の流れで突然に運ばれて行きます。そこには突然の変化が訪れます。或る人々には最新の戦争の記憶があり、敵国がつり上げた賠償金や銃床で小突かれる人質や、廃墟の記憶があることに注意して下さい。最後には勝利したとしても、誰もが戦争の結果には或る観念が生まれます。息子とか婿をそこに晒すことのない強い一族は殆どありません。そして防衛力の爆発は浪費や無駄遣いがなく済むことはないと良く考えなければなりません。お金持ちたちの快樂は、繰り返される不安の代償です。彼らの義務は曖昧です。一家の長は自分の生活を差し出さなければなりません。女性たちは、移動衛生班に行くことになりました。町に落とされた爆弾や新兵器は、お金持ちも女性も揺り籠の子供も容赦しません。それはどんな贅沢税よりも、あるいはどんな収入の減少よりも大変に恐ろしいことです。世界中の人々がそのことを知っています。

しかし、これらの災難や殺戮や貧乏人と同じ様に、人生のリスクを負う恐るべきゲームのことを話して下さい。不自由で疲労した貧乏人よりももっと元気に感じ、ついには彼らの豊かさが必要なだけ一般的になるのです、何故なら全面的な防衛はより重要であるからで、直ぐに彼らは目覚め、興奮します。彼らは人生が好きになります。大衆の歓声を待ちわびます。国の脈拍を数えます。彼らはついに戦争へ突き進みます。彼らは殆ど平和を罵ります。人は殆ど信じませんが、本当のことです。お金持ちは武器や力を崇めます。けれども実際に戦争という恐ろしいゲームよりも、民族的で平等なものは何があるのでしょうか。そして装填された大砲の砲弾に対して百万長者は何が出来るのでしょうか。

大変に明白な豊かさの証拠は、人から言われぬのが一番価値があることのように私には思えます。サロンでの繰り返す言やお喋りも多分その結果であり、信じ難い逆上も同様にその証拠です。彼らは戦争を受け入れます、何故ならその観念は会話という貨幣のようなもので、各人が精神の不安もなく、与えたり受け入れたりするからです。しかし坑夫たちの要求は、労働や賃金やお金

持ちについて何か新しい事を思考する必要性があるためにスキャンダルになります。それは何時も非常識なものです。つまり観念の創造であり、人は燃やして仕舞いたくなるのです。

(一九一二年三月十二日)

## 六十九 株主たちのストライキ (GRÈVE D'ACTIONNAIRES)

ストライキから生じる大衆の脅威という観念には十分に慣れなければなりません。私たちは鉄道員ストの時に、既に仕方なくそのことを考えました。しかしイギリス人たちは現在、もっと急を要する必要性を沢山被っています。ところが鉄道員ストの場合、全てが一般化され平凡です。労働者は自分の仕事をしなければなりませんし、資本家は資金がなければなりません。全てが自分の生活の義務になっています。必要性が国家権力を広げて行きます。それは契約を尊重した請求権と両立させることが出来るのでしょうか。

もしもそれが出来ないならば、取分け請求権は少しも存在しないことを注意して下さい。というのも先ずは生活しなければならないからです。そして私たちの裡において〈国家の安全〉は、株主とサラリーマンに少なくとも契約が結ばれて運用され次第である時も、お互いの権利を尊重する請求の手続きはあるのでしょうか。

ここに資本家と労働者を含む鉱山会社があります。彼らの意見は決して一致しません。それが彼らの仕事でもあるからです。そして一方の現存する権利は現状の賃金以上を支払わないという方に委ねられ、他方では或る一定の価値以下では労働をしないという権利のようなものになっています。よろしい、しかしこの紛争が広がったなら、国の脅威になるのでしょうか。最も合理的な解決は、国の問題をその儘にして、必要とされている業務を保証することです。つまりどちらかという、一方が他方を強制することではありません。その時、議論の余地のない請求権が一纏めになり固まって、その鉱山会社に行使されなければならないと私は理解します。何を言うべきでしょうか。権力は物質、労働者、技術者、出資者を手に入れ、生産するためにあらゆることを義務づけますが、一人ひとりを受け入れることを拒む状態の中におります。坑夫たちは自分たちの通常の賃金のために働き、他の者たちは自分たちの利益が少なくなれば、その結果〈国家の安全〉が一方に圧力を加え、他方にも圧力を加えます。そしてまさしく、最悪の場合にはそれらのことを押し進めながら、お互いが生きるために必要なことを少なくとも受け入れなければなりません。それは平和になるまで、つまりお互いを認めて和解するまでです。というのももう一度言いますが、国家の危機において、例えば共同防衛のための国民総動員において、兵士X、百万長者、兵士Y及びプロレタリアは、パン、履物、着物、防空壕を、厳密な意味で必需品であるから受け取るのであり、財産にするものではありません。

この解決は机上の空論です。しかし、それは本当の意味で自由意志による力、つまり本当に正義は豊かさに対してもっと多くの権利と、それらを示すために急を要する論拠をもっと多く持っているのであり、それは戒厳令という厳しい状況が来る前であり、そこから生じる急進的な平等が来る前であると十分理解させてくれます。

(一九一二年三月二十日)

## 七十 株主は語る (L'ACTIONNAIRE PARLE)

その株主は私に言いました、「イギリスの坑夫たちについてのあなたの話はおかしくありません。あなたはお互いの権利や国家権力について抽象的な理屈で楽しんでいるのです。何であろうとあなたは祈りで小麦を育てたいと思う人々と殆ど同じ理屈でいるのです。雨や風は、上手に話をすれば生まれるのでしょうか。潮流には公平とか不公平があるのでしょうか。気候や土地を知って人はそれに応じて作物を栽培します。四季によって人はディエップの満潮時を知り、それに応じて波止場を建設します。港には港の決まったやり方があります。ここでは小麦を栽培しますが、他の所では米が作られます。こちらには排水路があり、あちらには灌漑があります。あらゆる国が作物を栽培するように統治されています。鉱山や工場や鉄道も自然によって造られます。小麦畑があるように坑夫たちの仕事場もあります。鳥たちがいるように株主たちもおります。地主と小作人、主人と使用人、技術者、株主、サラリーマン、これらの様々な種類の人々も国によって作られます。大雑把に言って、彼らが国によってもお互いが似ているのは自然なことです。しかし、各々の国にはその国の大河や洪水や潮汐があり、市場や鉱山や労働組合があり、危機も解決もあります。水先案内人という人は起こる波に従って航行します。各々の状況は舵棒の一突き次第です。従って市場においての買手は、値切った後で買うのが常です。売却されるのは屢々その時です。しかし、あなたが買おうとしなければ、売手は商品の値を下げますし、そうでなければ空腹で死にそうな格好をします。それ故に海外では、結論が下されるのは市場です。そして何時ものように平均的価格を出して全てが終わる瞬間のように見える時でもあります。折衷法によってです、あるいは別の言い方をするにしてもそんなことは殆ど重要ではありません。イギリスは多くの原則を決して気にかけません。生産力は固有の法則に従って構成されるのであって、議論における考えを整理することではないのを知っております。というのも生活することと考えることは、二つ一緒であるからです。思考するのは、当事者でなく見物人です」。

パンに定価があるのは事実です。値切って買う力と高く売る別の力があることの証拠です。自由意志つまり市民という大衆の力があります。ところで自由意志の名で取り戻したり公共の力で訴訟人に課税されるのを人は毎日のように見えています。裁判の雑誌に書かれている出来事も本当

です。権利はそれらの事実の中にあります。ところでこれらの判決に、私たちは何を理解するのでしょうか。不平等な力は高度な力によって平等になり、それらを決定するのは理性です。呑気な粉屋の話は、同様な種類の事実として沢山の驚嘆を要約しています。私たちの裡では鉄道ストの時、自由意志は干渉し、働くべき鉄道員たちを非難しました。それは私たちの名誉が決定していました。私たちはそれに賛同するか非難することが出来ましたし、効果がなくもありませんでした。この状況でもしも自由意志が会社に何も要求することなく、鉄道員だけに何かを要求して法律の規範に従っているのなら、不審に思うばかりです。要するに、正義を愛することとは、空腹や喉が渴いた時に食べたり飲んだりするように、一つの行為なのです。

(一九一二年三月二一日)

(次章へ続く)

### 七十一 モルモン教徒 (MORMON)

私は最近、モルモン宣教師の講演を聴きました。全員が揃いました。そして私は、彼らが五十年前か六十年前にやろうとしていたことを私たちの裡で再びやろうとしていることをあなたに示すことができます。その上、今は彼らが一夫多妻を止めたので、彼らの宗教はスキャンダルにならないで済みます。そしてこの宗教は如何なる宗教にも似ていないかどうかあなたは考えます。

先ずは良識に沿った大変に満足の行く倫理があります。教会内での博愛と平等です。慈善は教会の内外で熱心に行われています。悲惨や受難に対しては闘っています。皆で祈ります。皆で精神活動を行います。それはメンバーの忠誠によって大変強固に組織化されて、皆から愛されている教会の思想に従うものです。その結果、怠け者は少なくなり、アルコール中毒患者や殺人犯も大変に少なくなり、驚くべきことに物質欲が極めて少なくなりました。それは全てが教育のお陰でした。そしてとうとう選ばれた特上の果実のように、魂を救い、教義を分からせる目的で三人の宣教師が自費でフランスに来ます。人々はこれらの有名な話を聞くと、モルモン宣教師の話をよく聞きたがります。しかし同時に、幸いなことに信じられない位に多くのモルモン宣教師が至る所に多くいると思います。というのも援助し、教育し、心を清め、貧しい人々を助けるための組織が、我が国には欠けていたからです。そして人々は尋ねました、「その点、あなたの宗教もそれ故に一つの宗教ですか」。

悲しいかな、その答えは叶いませんでした。私たちは道徳しか聞きませんでした。それは教義に止まりました。そして大きくなって、今になります。モルモンのような人が神を信じるのは自然です。そして、それは誰も怖がらせません。というのも私たちが望む〈正義〉〈節制〉〈英知〉を〈神〉と良く呼ぶことが出来るからです。しかし、それらはそこにありません。神は私が信じているスミスと名乗る創設者に啓示される、とモルモンという人も信じます。そして、このスミスは神を見たのであり、「私があなたを見るように」キリストを見たのです。そしてこの神は、アメリカの土着の歴史が記された金のプレートを告げた場所の大地を、彼に探すように命じました。そして、このスミスは金のプレートを見つけて、その歴史を読みましたが、彼が見た神がまさに本当の神であったというその日が、明白に証明されていることになります。ここでフランスの聴衆は笑い出します。しかし、それは全てを証明しています。金のプレートは素朴な人々によって見られたのであり、彼らはそれを証明しました。彼らのうちの何人かできえ創立者には弱かったのです。純金の証言も良識ある人というものが認めたように、全てを同じに証明しました。それ故にそういう訳で、正義が良くて望ましく、英知の良さと望ましき、勇気の良さと望ましき、節制の良さと望ましきがあるのです。確かに私は、それを知るために金のプレートに期待しませんでしたし、創立者の証言も、創立者の敵の証言も期待しませんでした。

観念の何という混乱でしょう。宗教の何という風変わりな混合でしょう。称賛すべき教訓や子

供たちを笑わせるお話の何という羅列でしょう。そして相変わらず最も明白になっている真実やそれらの固有の力を発揮させた儘でいる者たちは、歴史的分類とか、寧ろ次元が低い逸話的で真実らしくなくて真偽の確かでないものの主張の上に築かれているのです。もしも結論が固着しているとすれば、それは余りに証拠を無視しているからであると言えます。

(一九一二年三月二五日)

## 七十二 同盟 (LIGUES)

或る晩、私たち二人は〈人権同盟〉会長に対して頑固であったのは、急いで反対しなければならぬ極めて明白な不正が二つか三つ彼に示したからであり、彼はついに私たちに答えました、「あなた方は公正ではない。同盟は眠らない。三つの会議が今月開催されたが、それらは新加入者たちには役立つものだった」。この記憶は私が平和のための同盟やフェミニズム同盟のことを考える時に思い出しますが、それ自体のためにそれらは存続し、系統立って食事をするような活動をしており、脂肪や会費を蓄積して、それ以外のものは求めず、目的のために資金を手に入れます。それらは脳のない巨人たちです。あるいはぶんぶん唸っている蜂蜜の巣です。驚くべき活動であり、大変に整然としています。何時も同じです。会議も事務局集会も会費の徴収も会計係の計算も同じです。繰り返される昆虫の活動と同じであり、何のために行うのでしょうか。継続して何度も生産するためです。同盟はそれ自体で自ら思考し暗誦して機械的に言います。それ以上のものをあなたは何を望むのでしょうか。

同盟のメンバーが会費を支払った時は、自分で熟考したり望むことが許されたと判断しているのを信じるべきです。会長に関しては会計係と秘書たちが些細な仕事を行い、全く誠実に自問して言います、「同盟は上手く行っている。思想が道を作ります」。しかし、抽象的な思想は何も作りません。思想は出来事に答えなければなりません。外界の雷雨をすっかり明るくするために、私はすっかりした答えを望んでいます。言うことです。「戦争は憎むべきです。取分け戦闘員たちが同じ文明や学問や風習や正義を持っている時はそうです」。そして「私は平和が確保されるために、年間六フラン出しています」が、子供じみています。全く何にもなりません。六フランは協力費のためです。しかし、その後も協力しなければなりません。一人ひとり毎日意見を出して、自分の意志を言わなければなりません。

その時は好戦的な感情から議論が始まります。市民はその精神によって羊になり、辛抱出来ない肉体によって戦場の馬になります。各人が大衆によって増大する叫びそのものに従って考えや戦いを止め、役に立つ喜びを感じるや否や、その時は平和主義同盟が力を示して、大きなメガホンでも語る時です。フェミニズム同盟もそうでしょうか。直観的で本能的な運動です。威圧的な

叫びのように進軍中の大隊を止める必要がないのでしょうか。というのも民衆に反対する民衆、喧騒に反対する喧騒、時代に反対する時代がなければならないからです。大きな運動における個人は、水の上の藁のようなものです。ざわめきの中の個人の声はか細く映り、殆どが僅かで滑稽です。その思想は貧弱で愛がありません。オーケストラの中でびっくりさせられる一本のヴァイオリンのようなもので、大ホールの中でたった一つで軋んでいます。それ故に同盟には眼を覚まさねばなりません。議論のための議論、行列のための行列、感動のための感動に反対するのです。しかし、私は私に話しかける或る慎重な秘書の言葉を聞きます、「臨機応変に行動しましょう。雷雨を通過させましょう。最良の時を待ちましょう」。

(一九一二年四月一日)

### 七十三 戦争 (LA GUERRE)

戦争を予告する人々は戦争を望んでいるのか、あるいは諦めて受け入れているのかを言わせるために、彼らに尋ねねばなりません。これらの感情は曖昧でなく説明され、白日にされることは大変に重要です。私は昨日これらについて、老人で大変な軍国主義者と話をしましたが、彼の息子は陸軍中尉です。老人は言いました、「この熱狂は美しい。それは再び熱くなる。長い間、私たちは平和主義の眠りに身を委ねていたのだ。私たちを軟弱にしていたのだ」。しかし、私は彼に言いました、「この国家的運動が侵略かどうか知る必要があります」。彼は一呼吸置いて答えました、「あゝ、私は危険な目に遭わせている当事者をもう一人知っている」。しかし、私は彼を追い詰めて言いました、「結局のところ、私たちにはあらゆる機会があると私は思います。あなたは取組むことです。私は、ここにいるあなたが言うのを聞いているのであり、私は誰と話をしているのでしょうか」。彼は大変に真面目な顔をして言いました、「私は父親だ。これらの決定に関する責任は他人に任せている」。

問題点はそこにあります。それらの決定に関しての責任を誰かに任せてはいけないのです。国民という大衆が政治を導かねばなりません。共和国の政治家が、習慣や大多数の意志に反対する冒険において、不意に国民を捨てようと計画を立てられ得るとは誰にも認められておりません。そして、そこに何故質問しなければならないかがあります。というのも私たちはヨーロッパでは一つの国民であり、それは馬を調教する時に使う鼻革で統治しているからです。それは同じことでも全てを変え、全く不可能ですが、私たちの方からの侵略することもあらゆる国が知らねばなりません。だが更にその上、一人ひとりはおもっていることをはっきりと良く言わねばなりません。そうしないと、泣きわめくことが世論になって仕舞います。

そして、恐れている人々とは何でしょうか。その道の専門家は、自分の武器を試してみようと

思います。しかしその傍で、多くの老人たちには極めて気に障ります。けしからんことです。というのもそれらの魂胆に自分の胸を提供しない者は、決して戦士になれないに違いないからです。それは余りに容易すぎます。従って多くの女性が優雅であるのは、自由に対しての盲目の情熱や、勝利した或る暴君の希望に従い導かれると私は思います。しかし、結局のところ何故女性は戦争を押し進めることが出来るのでしょうか。国民の敵の数を全て教えましょう、彼らは確実に共和国を粉々にして、全ての危険を負わされている災難が如何なるものかを知らずに漠然と望んでいます。しかし、貴族のこの小さな群の背後で彼ら自身は何も出来ませんが、彼ら自身に真面目に質問することなく、他人事のように叫んだり言ったりすることを繰り返す多くの人々を私は見ます。私たちの心の裡のように外国人の心の裡も、疑いを抱く者は本性から孤独なのです。眠っている者を全員目覚めさせなければなりませんし、彼らは何でも怖がりますが、残虐で莫大な費用がかかる戦争は別です。既に大変に難しいことですが、無知や悲惨や病気や犯罪に対してすべき良いことを、彼らに示さなければなりません。それ故にヨーロッパの平和と進歩は、恐らく各々の国に十人はいる人間の勇気と良識と説得力のある雄弁次第であると私は信じています。

(一九一二年四月三日)

#### 七十四 ドイツからの帰還 (RETOUR D'ALLEMAGNE)

ドイツへ行って戻って来た人々は、殆ど全ての人々が戦争の話をしています。平和のメッセージが国境を通過して到着するという事だけは殆どありません。そこを一回りした学生は何を言うのでしょうか。学生は〈フランス文化〉を称賛します。術学的で博識で、形式張って融通が利かず、高慢で暴君的な〈ドイツ文化〉に反対します。私は、少し安易すぎるこれらの意見の進展も真実と理解しています。しかし、どんなに些細なことのためでも戦わなければならないのでしょうか。勿論、そうです。どんなに小さなことでもそうです。私は〈美〉に生きる人々を嘲笑します。何よりも私が彼らに興味があるのは、その倫理的思想です。ドイツ人が女性や子供たちのために、アルコール中毒やコレラ、暴力や盗みに反対する規範があるかどうかを私は知りたいのです。彼らはそれらを持っていることを私は知っています。社会の進歩にとって私たちフランス人と同じ障害が彼らドイツ人にもあるのを私は知っています。正義は屢々〈正義〉にぶつかるようなことがあるのです。そして、私たちと同じ様に彼らの多くも、それを決めるのは優れた敵のお陰であると考えてるのを私は知っています。しかしながら、もしもここで両者の相違を指摘したかったなら、多分、彼らの社会主義は私たちのものよりも合理的で、秩序や法への服従をより大切に考えていると言わなければなりません。少なくとも、そのように私たちは言っています。

そして、自分に忠実になって恐れずに私が結論を言うなら、彼らも私たちの仲間になることが出来ます。〈文化〉や〈美〉について議論されます。しかし私が敢えて言えば、彼らが〈フランス文化〉と呼ぶものは、私にとっては何か曖昧です。今、〈フランスの美〉の騎士のように一身を捧げている人々は野望を持った人々であり、彼らは自分たちのペンを心配しているのであり、滑稽さを恐れて退屈や渴きを表しているのです。確かに私は、ロマン・ロランのジャン・クリストフのように素朴で不器用で力強いドイツ人であればある程彼らを愛します。しかし結局のところ、本質の多様性が私は好きであり、尊敬されるに違いないのです。一人ひとりが思考して、良いように書くのです。そこには如何に〈文化〉のために戦い、野蛮を拒否しなければならないのであり、私は〈文芸評論〉が戦争のためにも耳打ちするようになるのをやはり愛しません。

その後、その旅行者は何を再び言うのでしょうか。ドイツ人たちは決して私たちが愛しません。このことは、理性的人間は信用しないに違いありません。私たちの家を調査しに来るドイツ人を想像してみましょう。彼の国について偏見のない話を聞くことが出来るのは何時でしょうか。講演でも授業でも至る所で、或る種の故意の不公平が要求されています。講演者は何時も、私たちと戦ったこの国民を非難するようにならなければならなくなります。そして私は、講演者や作家たちが屢々私たちに良くない自己満足を見せて、惜しみなく与えているのを知っています。ドイツ人も同様に私たちの裡に根を張った深い憎しみがあるのを語りに出掛けます。彼は何かを間違えています。というのも私たちの国では大部分の人々が、極めて公平であるのを知っているからです。しかし、人前で人々は拍手喝采を求める喜劇役者の言うことしか殆ど聞きません。私はそれらの驚くべき力を恐れません。それらはあらゆる思想に反対します。この様にして二つの国民は、少しも勇気がなければお互いに認めなくなります。しかし、そこで良く考えて下さい。容易で怠惰でおべっか使いの言葉を何時も言っていると、両国の中で最も勇気があって公正な人々が殺されて、私たちに恐ろしい戦争へ導くのであり、そこでは大袈裟な演説や戦争が何度でも行われる結果になります。平和主義者たちはこのことを良く考えています。戦争を止めるのは、戦争の恐怖ではありません。戦争を齎すだろうという話をするのが恐怖なのです。

(一九一二年四月九日)

## 七十五 作家たち (ÉCRIVAINS)

政治サロンは何時もあります。野心を持った作家たちは何時もおりますし、才能がなくはないが猛然と急いで偉くなって称賛され愛されようとしめます。政治サロンは何時も作家を引き付けますが、それが好きな者は鉄を引き付ける磁石のようです。それは男と女の矛盾というものを拒絶して、断固として不条理な意見が何時も形成されています。何時も作家は教義のような意見を求

めます。何故なら気に入られたいからであり、可愛らしい女性たちには先ず大變に優しい独裁者だと感じさせますが、やがて傲慢になり、直後に軽蔑されます。心底そう思います。何故なら議論を生んでいくテーマについて変化をつけるのは、大變に容易であるからです。最初は臆病になっても、後で自信になることも遠くありません。

まだこれから、サロンに関する意見に如何なるものがあるのかを知らなければなりません。最も多いのは宗教的なものです。無宗教のものも見られます。恐らく、ナポレオン支持者であり、かなりの君主制擁護者です。穩健派の人ですが、兎も角直ぐに反動的になります。決して急進的ではありません。全く単純に、主権在民を受け入れているサロンは一つもありません。孤立していることは不可能です。どんなサロンでも腹の底では労働者、小店主、急進的委員会や新聞、代議士、大臣に対して明らかに軽蔑しています。もしもその集まりに大臣とか代議士がいたならば、そのことでは他人を一層軽蔑して、自分が軽蔑されないようにします。サロンは全てが平等に反対なのです。

それ故に田舎からやって来た作家が、機知や虚栄心があり筆が立つのを私が理解する時、彼が持っている意見を私は正しく知りませんが、彼が持っていない意見なら大變に良く分かっています。私は近頃、番犬をその日の朝に購入して住ませた人と会いました。昼前にはその犬は自分の主人を崇めて忠実になり、貧相な人々を嘔んでいました。才能ある人も自分の仕事を早く覚えませんが、そういう血筋であれば当然のことです。その犬は純血種でした。毛や斑点や鼻がそうでした。その文学者も二十年かかって出てくる性格を持っていて、大衆に対して忠実に吠える約束をしている人です。もしも彼が全てを疑い、政治を知らず、恋愛の喜びを抱いていたなら、彼は恵まれています。彼には首輪と犬小屋が与えられます。

これらの意見の力は並外れて大きいものです。劇場や小説や雑誌や新聞によって連続して、注目すべき洞察力で働きかけます。社会主義者のブリアン氏が裏切ったとするなら、彼への讃辞がいかばかりか見て下さい。それに反して、平然として大衆の味方である政治家ペルタンに反対するコンサートはどんなでしょう。私が理解する人々は余りに急進的です。しかしながら毎週、私は政治家の中に最も教養があり学識がある人で、恐らく最も注目すべき演説者の一人を思い起こさなければなりません。確かにずっと前から彼は最も強いジャーナリストでもあります。しかしそれにも拘わらず私が気に入っていることは、彼には血筋がないことです。彼はお金持ちに吠えます。

(一九一二年四月十三日)

畑の黒褐色の筋の上に、三列になった白い波が続いてうねっているのが見えます。間もなく大地の起伏の中で耕している三対の番いになった牛たちが眼につきます。犁は大地の中で見えません。牛飼いは、長い触角を持ったひよろ長い昆虫のようです。牛は規則正しい力を出して行きます。畑は豊かに実り、密生して滑らかで柔らかく、雲よりも明るい緑に粹取られています。果実の木々が、その中にある村を囲っています。地味で目立たない一本の木が地平線を蔽っています。その上方では四月が戦っていて、僅かな雪が忘れられたように放置されています。深い青空が広がっています。太陽光線の矢が、大地のあちらこちらに刺さっています。私は二羽の怠け者の鵲を見ます。その生き方は容易です。歌いなさい、牛飼いよ。あなたの牛のために歌いなさい。

その牛飼いは決して歌いません。彼は真面目で痩せた少年です。厳しい征服者であり、支配者であり、平等主義者です。牛たちは軛（くびき）を付けていますが体は自由です。二頭ずつ牛たちの頭は繋がっていて下がっていますが、大地に向かって伸びています。畑の端に来ると回転しなければなりません。土手は滑りやすく危険です。働かないために汚れていない牛たちの中から一頭が低地の方へ移されますが、まるで角からぶら下がっているようです。もう一頭の牛が仕事につきますが、無情の軛で首が振れます。一組の牛たちは躊躇して、大地に突っ立ちます。その時、一頭の好戦的な黒い牛が飛び込み、奴隷となった肉の塊にその槍をぶつけます。三つの軛が一行に並び、新しい犁も大地を噛むように耕します。古代の奴隷です。牛飼い座のアルファ星の赤いアルクトゥルスも既に、詩人ヘシオドスの時代である紀元前八世紀頃に、これらのことを見ていたのです。

ウェルズ(1)の小説に書かれた火星人たちが地球に来た時、彼らは煙を上げた発射体から出て、その機械を修理するのに忙しいのです。人間たちは集まって眺め、鏡を使って火を付けて殺しますが、それは私たちが草を抜くようなものです。あるいは蟻を踏み潰すようなものです。その次には黒煙によって彼らは人間の害虫を整然と根気よく、何ら同情することもなく根絶しますが、私たちが南京虫を殺しにかかるようなものです。この敬意の欠如は、人類を突然に兎や鼠と同じ状態に投げ入れます。この作り話には如何なる儀式もなく、全てがありの儘の力であるということを理解させるに相応しいものです。この様にして私たちは、馬や牛を犁などに繋げます。

人間の姿をした火星人たちが車から出る時や、窓口に一行に並んだ時や、攻撃を開始する時も何か似たようなものを人は見ます。大変に長い間、仮面もなく形式ばらない力は理解されませんでした。「私たちになくてはならないのはあなたの車だ」。不必要な余計な文です。それは或る種の生き残った儀式です。昔はジレンマが生まれました。「お金か人生か」。しかし、憲兵も同様に言いました、「あなたは書類です」。即座に、反撃は攻撃を模範にします。先ず、頭を拳で一撃します。この様にして一体一の対談が始まります。そして、被疑者が問題になります。戦争がここで顔を覗かせます。

その次には弁護士たち、証人たち、裁判官たちです。これら全ての征服者や全ての勝利者の後も更に嘗てない程に、拳での平和を樹立し、正義のための意志があるそこには驚嘆すべき素晴らしいものがあります。牛飼いよ、歌いなさい。あなたの牛たちのために歌いなさい。

(1) ウェルズ (一八六六～一九四六) は、英国の小説家でSF小説の開祖である。

### 七十七 復活祭の鐘の音 (LES CLOCHES DE PÂQUES)

私は、陽気なカリヨンが奏でる組み鐘の音を聞いた時、歌の周りに良く響く水蒸気のようなものがあるように感じていました。それは又、別の音楽を生んでいました。というのもカリヨンは庶民の音楽でしかなく、リズムは明快であって迅速に激しく打たれる鐘の音は、楽音というよりも寧ろ騒音に近いものでした。しかし注意して聞いたら、豊かさと発展に満ちた空気と空気が結合して結婚した音になっていました。音楽家にとっては金鉱です。

真実の音楽は、音楽そのものから自らを生み、土台の豊かさが音楽自体を生産します。驚くことは何もありませんし、それは全て待っていますけれども予想は出来ません。それらの音はお互いに一緒になり、離れては結び付き、丁度良い時に名が付けられ、消えたり見付かたりするこれらの音は織物の糸のようであり、助奏であるオブリガードがあるのは当たり前で、相殺もありますが道は開かれ、大地の奥にある水源の如くメロディーが住み着きに来る澄んだ空間になり、音として完全に充実し、会話になり、時間という果実の再生であり、心奪われるものがそこにあります。私が信じるべきものとは、科学ではなく、只聞き手の能力によるのであり、各瞬間に上手く行きそうなものを助けて見分けるのであり、そして消えたりするのです。というのも良い音楽にはその周りに沈黙という余白を生むものがあることを認めなければなりません。振動するものは全てが音楽を始めます。あるいは消して仕舞います。その代わりに出来の悪い音楽家は騒音という紙魚(しみ)を創るのであり、聴くに堪えられないようなものになります。要するに、真の音楽家は必要性によって存在しているのであり、それが自分に課せられているのです。鐘の音の最初の響きが他の音を呼んでいます。それは美しい旅が始まるようなものです。人は出発します。水平線が何処までも続いて行きます。しかし、下手な水先案内人は鉤竿を引っ掛け、ロープや麻布に挟まれて岸に張り付きます。かくして打ち返す波の音やひたひたいう音にも音楽があります。最悪の場合には、その執拗さによって人は逃げて行きます。いずれにせよそれは何の価値もありません。私はそれに道徳的価値を与えるのであって、音楽的価値ではありません。聴くことが重要であって、それは望むことではありません。

もしも偉大なシャンソンを蘇らせたかったなら、演奏者は何にでも自分の才能を合わせて調整しなければなりません。というのも作曲家は楽器や建物に従った最高の音声というものを全て予

測していなかったからです。遵守して行くものを考え、最初の素描から抜け出させて、最高の音の一致に出発するのが演奏者であるべきです。歌手は喉の力により守るものを自然に準備します。ヴァイオリン演奏者は指の振動により弦を塞いで付随的な音を選びます。ピアニストは最後にペダルにより、最適な弦を全て緩めたり抑えたりします。慎重さや内容がなければ、最高に美しい音楽も聴くと平凡になることは良くあります。最も難しいことは最高の音である、と言わなければなりません。美しい歌曲が最高に美しい音の始まりから直ぐに如何にして生まれるのか、あなたは自問させられたのでしょうか。

(一九一二年四月十六日)

## 七十八 演劇 (DRAMAS)

タイタニック号の大事故やそれに伴う様々なことは、小さな子供たちにも良く話をすべきだと私は思います。特に無線士、音楽家、乗組員そして全ての人々が行った美談は、ついに恐怖に打ち勝ったのです。というのも私は倫理を教えるのは重要であると思うからです。そして宗教的な教義から離れた自由な精神は、義務の観念が偏に奴隷に似合うと言ったり、義務を軽蔑して自由な人間を決め込んで倫理も損なうことになるのでは余りに早計であると思います。この義務の観念は純粹で無垢なものの中で修復されるに違いありません。それが英雄の自由に適さないとはとんでもないことで、反対にそれを決定しているのです。

全ての動物には恐怖があり、恐怖に負けます。動物たちは空腹が恐怖よりも強くなる時しか攻撃しません。それは抑えられない欲望です。それ故に動物を恐れたり、あるいは哀れんだり可愛がったりすることが良くあるのです。動物を評価して尊敬したり敬服する理由は決してありません。動物には倫理観が決してありません。危険や苦痛や快感や情熱が強襲して来た時は、自分を堅実に抑えて管理します。同情や忠誠心や慈悲とは既に、情熱の感情です。倫理観は決してそういうものではありません。情熱の感情に従う者は既に、動物的性質に身を委ねているのです。最初に先ず怒りに取り憑かれ、その後寛大になる人間は、何時も動物が変化した者でしかありません。倫理観には申し分なく寛大さが含まれており、そして申し分なく怒りも含まれています。何時もそうです。何よりも恐怖なのです。そして義務とは何でしょうか。それは人間としての責任であり、動物でないことです。つまり情熱の感情に慣れること、基本的には恐怖に慣れることであり、どんなに小さなことでも大きなことに眼を向けることです。

それは如何なる隷属にも与しないことであると十分に気付いて下さい。まさに隷属とは反対であり、そのことは全ての隷属を打ち砕きます。義務とはその上に君臨することであり、決して降参することではなく、この内面の統括を決して誰かに譲り渡すことではありません。そしてその

ことは倫理が十分に純化して、或る種の主人や神というものを退けることを理解させています。義務はそれ自体で自足しています。怖がる者には何の信用もありません。逃げ去る者にも何も自負するものはありません。そのことを十分に考え、英雄たちが見せている例を十分に注意することです。特に、十分に自分自身で判断することであり、先ずは他人の判断を超えて自らの判断に取り掛かることです。それを愛するためには自由を十分に味わうことです。

しかし公務員や市民や若者たちは、完全に間違った考えで奴隷化させられないように、この力強い成長を何よりも受け入れなければなりません。それは他人への義務となるものです。個人の尊厳は傷付けられ踏みつけられます。倫理観のない主人たちは暴君であり、同時に奴隷でもあります。他人を恥辱するのが大好きで、それを称賛し、それに報い、四本足で歩いたりしないで人間らしく二本足で行動したい大胆な者を即死させます。あなたはその人のことが話に出ると、如何にして小学校の先生扱いされるしかないのかを理解すべきです。殆ど何時も鞭が上がります。もしも傍にいる人々がまさに諂（へつら）っているなら、彼らは称賛されます。そして既に大変に多くいる暴君たちは、或る種の激しい情熱で動物へのこの間違った調教を実行して、今日では余りに忘れられている義務の心を生き返らせるために働いているのである、と思わせたいと暴君たちは言います。この混同した考えは、もしも私たちが誰も注意しなかったなら、臆病者や奴隷が昇進して、社会という肉体は頭脳を下にするようになるのです。

(一九一二年四月二五日)

## 七十九 権力者の友人 (L'AMI DU POUVOIR)

私たちが政治のことを語ると、意見の表明を繰り返す優れた友人が私におります。「私は何時も政府の味方であることを忘れないで下さい。政府が立ち去る時しか私は手綱を緩めません。そして直ちに私は交代した政府にも好意を感じています。私にはそれが自然なことです。不平を言って反対することは私にはうんざりです。叫ぶことは余りに容易です。もしも不満分子たちがそうしたとしても、もっと良くなるのでしょうか。私には政府と相對する難しさの方が力強く感じます。それは出来事が導くことを私は知っていますし、些細なことが大きく変えることも知っています。もっと正確に言うなら、もしも私が彼らの立場であったなら、震えて舵に触れることも出来ないでしょう。従って私は同情して、同様の仕事を余儀なくされた忠実な人々を拍手喝采して元気づけるつもりでおります。もしも彼らは間違っていると私が思っていたなら、そのためにそれらを奪うことも私は自分に禁じないと思って下さい。そして友情を込めて、それらを強固にしようとするのであり、倒すのではありません。要するに、私は品行方正で善良な市民であり、そのことを忘れないで下さい」。

この話は私たちを大変笑わせました。というのも問題のその友人は誰にも指示されず、直ぐにかつとする正直なお喋り者ですが、熱烈なドレフュス派でした。私は彼の話を聞くと、大臣は何時も公然たる敵よりもその種の友人たちの方を良く恐れると私は考えます。というのも敵は権力を奪いたい人々であり、本能的に何時も自然と職を失わないように少しは考えているからです。その時は高度な政治や原則についての議論が行われます。名誉あるやり方を行うことができます。その友人があなたに対して小さな落ち度や、手間取っている計算や、正常でない支出や、任命や、通達や、仕事の遅れや、その他の同じ様なことを直すことはなく、政治学博士としては大したことはありませんが、市民としては偉大です。何でも反対する彼は最早、気取ったものの言い方をするか静かに辞任することが重要なのです。しかし調べて考え、机で仕事をして、結局は管理しなければなりません。そして、以上で上手く行きます。

しかし、政府を倒すことしか考えない者は、何の役に立つのでしょうか。政府を支持する者が眼を閉じた儘信用しても、最早殆ど役に立ちません。以上のとおりです。しかしながら、そこには偉大な政治や政党の政治に私たちを導くものがあります。というのも政府が失政で倒れると、型通りのことが行われ、後任になった者たちも決して改めることがないからです。敢えて話すまでもありません。倒れた大臣たちは後任者を援護します。良き代議士とは、私に言わせれば脅かす者であって攻撃する者でなく、その大臣を働かせる者であり、追い払う者ではありません。この鞭をぱちっと鳴らす技術は、私の考えでは未来の政党を決定しますし、それが本当の急進的政党であり、私が〈野党〉と呼んでいるものです。

(一九一二年四月三十日)

## 八十 英雄崇拜 (LE CULTE DES HÉROS)

道徳教育は英雄崇拜に基礎を置いています。今後、タイタニック号の遭難を語る時には何時までも人間性のことが真実の姿となって見せてくれます。一人ひとりが心の優しさそのものに感動し、人間の本当の運命を理解したのであって、神秘的啓示や超自然的光や曖昧さや巧妙さではありません。そこには良き出発があります。その儘で倫理や英雄を表すことができます。何もかも混乱させるために手を突っ込む〈政治家たち〉が許されないことを私は望むだけです。私が〈政治家たち〉と呼ぶのは、自分たちの財産を築くために道具があるように、彼らは人間における最良のものと最悪のものを利用する者たちです。

これらの驚くべき死者たちから戦争の称賛へ、大変に早く移り過ぎて行きます。実際の戦争は、前提とされた美德によって支えられています。感嘆は憤慨を黙らせます。そこでの政治家たちは、人間の仕事の中で最も気高いのが戦争であることを私たちに理解させようとしたがって

ます。英雄を創るためには特別の遭難を生まなければならないと言ったとしても、同様にもっともなことです。でも、この考えに引きずられることには抵抗しなければなりません。ナポレオンの赫々たる武勲は美しいものでした。ナポレオンはまさしく天才的な指導者でした。何故なら地上の指導者として尽きることのない英雄主義の源泉を知っていたからです。それ故に彼は、恐怖や退屈に勝つ機会や、あらゆる情熱に勝つ機会を与えていました。彼は崇拜されました。負傷者たちは自分で立ち上がって叫びました、「皇帝万歳!」。そして、これらの話を聞いた者も又、衝動から皇帝を崇拜し始めます。そこに間違いがあるのです。崇拜が崇拜になって行きます。軍隊が美しいものになります。負傷者たちが英雄になります。皇帝は恐らく、冷静な喜劇役者でしかありませんでした。もしも何時も大胆にやってのけたなら、それは何時も情熱や自分の力のためでした。恐らく、怒りがそうであるように、勇気にも計算が何時もありました。これは議論があるところですが。しかし、瀕死の人がまだ自分の考えを守っている時は、彼自身の希望はなく、苦悩があっても疑いはありません。英雄に敬意を示さなければなりません。

戦争の歴史はその様に語られたに違いありませんし、何時も〈英雄たち〉を持ち上げて〈政治家たち〉を低く見ていました。不幸とはまさしくそれとは反対のものを生みます。冷静な外交官を屢々賛美するまでになり、代理人を介して戦います。戦争の歴史は戦争と反対の方へ行かなければなりません。というのも英雄は両方にいるので、至る所で崇拜されているからです。何故、同じ美德を大切に作る人間たちの間で、平和が長続きしないで、彼らは弱者を守ったり自分を殺すのと同じ気持ちで献身するのでしょうか。もしも自分の人生を捧げられるとしたなら、何故不公平になるのでしょうか。戦争を望んだり、それを他人にやらせるか、あるいはお手本を何度も見せる有害な悪意ある人間の数はこの世には少なくなければなりません。しかし、憎しみ、激昂、殺す快樂、勝利の陶醉、不正への陶醉、真の英雄を心に引き付けながらもそれは単純で意地悪です。この様にして正義と不正義は混じり合い、勇気と乱暴も混じり合い、戦争を受け入れさせています。そしてあらゆる人間が戦争においては、最良と最悪を何時も両立させていて、最悪を免れさせていると言わねばなりません。以上は、戦争が愛される理由になっています。

(一九一二年五月三日)

(次章へ続く)

### 八十一 人民の友人たち (AMIS DU PEUPLE)

有権者と当選者の関係とは、ある時は政治家が再選されたり、ある時は交代する原因を解明するなら、結局は長年に亘る誠実さです。その次には、急激な変化は何も期待していない時に生じるのです。そのことは全てが深遠な学問の対象になり、世論という本質的な歴史として存在することになります。しかし、政治的情熱は私たちに今は偏見を押しつけます。

シーザーは、市民権を持つ者たち全ての名前を知っていました。ナポレオンは精鋭兵に、軽く言うことを聞かせました。無名の市民は、重要な人間に自分の名前を言われて覚えられていると分かると、嬉しくなるのを私は知っています。それは実際に、国王がやっていたやり方です。ペランジェ(1)の叙事詩で女が言っているように、「私はその後、国王のグラスを守ってきた」のです。しかし、この種の人気は恐らく、もう現代では時宜に適っていません。不平等を前提にしていることに気付いて下さい。素朴さや親密さは、大変に身分の高い人物の心しか打ちませんし喜びません。いずれにせよ、それは稀有なことに違いありません。あるいは探していた人と完全に反対の印象が生まれます。単純すぎることは大胆さを与え、大胆さは観念を与えます。全ての感情がここでは二重底になっています。もしもあなたが余りに単純であったなら、気難しい友人たちを作ることになります。そして、もしも或る日あなたが悩まされて我慢出来ないとか、あなたに話をしている間彼がぼんやりしていたなら、そこにいるのは敵なのです。

もしも正義や平等に対するあなたの愛が、あなたを弱そうに見せて子供たちと共に教師たちにもそれが起きるなら、もっと悪い何かがあるようになります。この軽率さによって大変に軽蔑されるようになるかもしれません。老貴族の陸軍大佐は少しもそんな風に見えませんが、彼の気立ての良さにはびっくりさせられます。同じ様に政治色は陸軍中尉にもなく、彼が庶民の子供であったならば尚更そうです。というのも平等が確立されると、素朴さや簡素さはその価値を全て失います。〈高慢ではない〉人のことが言われる時、それは彼が存在し得ることを仮定しているものであり、そうであって欲しいと期待するのと同じです。要するに、もしも愛されたいと思うなら、余り気に入られようと努める必要はありません。その人が持っている性格的な率直さや正直ささえも信用してはなりません。

現代の民主主義においては、これらの感情の働きは交錯しています。不平等に反対する批判的な精神があります。有権者だけが力を持つことを当選者に感じさせるのを人は愛しています。彼がお金持ちで雄弁で博識で、精神的に国王のようなものを持っていたなら、その働きは人々の気に入られます。しかし、もしも全く気取りがなくても自分の力を完全に忘れていたなら、国民は最早彼に見とれません。熱狂は不可能になります。それは思いつきで要求する制度になります。悪ふざけをする人は真に受けて仕舞います。田舎の人々は滑稽さを強く感じます。同様に、教義の形式に何か〈反対すること〉を酷く軽蔑します。それに高級な雄弁が武器になります。何もな

いのなら、些細な軽蔑や悪意の種子でも考えられない位に役に立ちます。

(一九一二年五月十二日)

(1) ピエール・ジャン・ド・ベランジェ (一七八〇～一八五七) は、感傷的で愛国的な詩を創った。

## 八十二 ポスター (AFFICHES)

大きなポスターで世論を導いているキャンペーンは、純真さを見せている田舎の人々を私たちから隠したがついています。苛々している人々は結果しか見ませんし、その原因を忘れます。〈宣伝〉は小さな怒りを無視し、多分それを利用します。というのもスキャンダルや興奮というのは、〈宣伝〉というゲームにも入っているからです。全く新しい芸術ですが、既に抜け目ない観察者たちによって新鮮さを失い、型に嵌まって仕舞っています。

〈宣伝〉は説得したり気に入られることを狙っていません。その仕事は、私たちの記憶に或る名を刷り込むこと、それが目的です。複数の製品に迷うと、その記憶が秤の重さのように自動的に働きかけます。その様なことは少なくとも、人々が皮肉にも言っている現代の〈学校〉の原則になっています。何故なら目的に真っ直ぐに行くからです。正式でない昔からの〈学校〉はそれとは反対にじっくりと思考し、情熱を満足させることを望みます。腸や肝臓や胃についての興味ある単純化された理論や証明や病気の話は、全てが公共の広場で何時も話されているのが思い出されます。「私は、手品で想像力を働かせる者ではありません。私は、あなたの良識に訴えるのです。何よりも先ず理論を当てにします」。その上で、大衆は耳を傾けて聞いてくれます。しかし、この雄弁はあらゆる雄弁がそうであるように、その証明は繰り返して言う方法が唯一の方法でしかなく、同じ形式で何度も聞かせる機会を持つことでしかありません。同様に、表面上はもっともなこれらの出鱈目な印刷物は、恐らく眼で見て気を引くための物であり、結局は記憶の中で思い出するための物です。この様にして、小麦粉の生地や石鹼に書かれた四行詩の広告は、何時も手品を見るような驚きをもって見ます。しかし結局、その四行詩は私たちが生地とか石鹼を買う理由にはなりません。それは単純なことです。何故ならその注意力は既に昔の刻印以上の力を与え、既に消えた版面に更に鑿で彫ったようなものであるからです。従って、韻律や脚韻の理論が生き生きとした光とか巨大文字と同じ方法で作用して来ます。そして新聞の頁を使って、殆ど雄弁術のやり方であったり、又は何回も続けて繰り返して同一の文字を印刷するのと同じ方法が採られて行きます。この様にして臆面のない学校は勝利を収め、あなたが何らかの美しい遠近法を自分の眼で見た瞬間に、適切なポスターの中の一枚を示しながら、立腹して気に入らない

物があっても、そこには利益が生まれます。

さて、更に他のことも考えなければなりません。それは商売そのものの〈宣伝〉行為です。それは節度がありません。宣伝の何らかの仲介業者の申し出を拒絶した者には、待ったなしで罰が与えられます。彼は新聞を見て、昨日まで知らずにいた競争相手の名前を至る所で見て、そこから避けられない不安が起こります。そして製作者にしてみれば、その固有の宣伝を読ませるといふ圧倒的な必要性があります。製作者がその必要性を創り出すのは、売るための必要性であることは分かっています。しかしポスターを売りたいのも〈宣伝〉であり、製作者に絶えず影響を与えることも忘れてはなりません。〈宣伝〉には広告ベースと手法、それに反対したくないような脅迫的な機構というものがあります。ポスターの力がどうであろうとも確かなことは、千人程の仲介業者たちが弁護しているかどうかは殆ど聞かれないことです。非難しているのは、至る所で疑っている何百万人の人々をその儘放って置くことです。この力を良く考えて下さい。そしてあなたは、風景を汚すこれらの大広告がしっかりと沢山立てられているのを理解するのです。

(一九一二年五月十七日)

### 八十三 ジャン＝ジャック・ルソー (JEAN-JACQUES)

昨日、或る人が私に言いました、「あなたはジャン＝ジャック・ルソーの生誕二百年祭のことを考えますか」。確かに私は、彼のことをすっかり忘れていたところでした。私がこの人物を蘇らせることを考えるには、余りに生き生きとしています。しかし結局のところ、公式発言で言われていないとするなら、多分今は書く機会です。

恐らく、彼の作り話は消さなければなりませんし、その亡霊を友人とか敵の亡霊とも議論させて、生き残っているものを考えさせなければなりません。しかし何時もそこに戻るなら、再び彼の本当の立場に立たなければなりません。彼の思想は矛盾して来ます。というのも、そういうものが彼の運命だったのです。彼の力強い才能は、些細な出来事を超えています。彼が表しているのは学派でもサロンでも社会でも階級でも友愛でも敵意でもありません。彼は目撃者だったのです。

この放浪者を想像して下さい。彼には金利収入も俸給もなく、偏に自分の好奇心と喜びに従って独りで勉強していました。音楽の勉強も大変に良く行いました。何故なら彼は音楽を愛していたからで、同様に植物学も愛していましたし、正確に学問を實踐して教えるためではなく、知るためであり、世の中の評判には関心がないので、壮年期になってしか書き始めませんでした。そして、それらは彼の思考の内部的力によって表したものです。そこには少しも平凡でない教えがあります。

作家たちはそれを決して理解していません。彼らにとっては、それは響聲を買うことなのです。二十歳になると既に誰もが作家になっています。学校の腰掛でも同じです。彼らには野心と能力があります。将来、彼らは友人たちの輪によって支えられます。結局、彼らは書くのを仕事にします。彼らの著作は必要性の産物です。

ジャン＝ジャック・ルソーは、この窮屈さや奴隷から逃れました。彼には友人たちもいましたが、友人たちの気に入るようには決して行いませんでした。鎖を感じると打ち砕きました。従って彼は中傷され、そして生涯の終わりは大変に不幸でしたが、何時も自由でした。恐らく、自己を形成して真の孤独の中で表現している人を私たちは他に知りません。妻のテレーズが時計の文字盤から時間を読むことも教えて貰えなかったことに注意して下さい。この妻との会話は、思想というものと全く関係のないことであつたのが分かります。この男にとっての不幸とは、思想家でなくなることでした。

従って彼のこの性格の特徴を、注意深く考察しなければなりません。彼の苦悩や喜びは、しみつたれた卑小な会話から気分流された小さな原因が大きくなったものです。しかし、彼の思想とは何ら関係がありません。それらの思想は、全てが自由と偉大さを証明しているものです。『エミール』は悪しき父親の作品ではありません。『新エローズ』は恋の冒険として独創的で、殆ど滑稽で時宜を得たものでした。その軽視すべき卑小な人生は、思想の形成を取ることが出来ませんでした。その代わり、尊敬に値する人生は裏切られ、偏見を表現するのです。ルソーは結局のところ泥沼から逃れて、彼だけの法則で勇ましく固有のものを生む思想を私たちに理解させてくれます。自分の根によっては動けずに締め付けられて手足を失った植物に似た者は、まさしく花々の中に逃げ込んだのです。

(一九一二年五月二五日)

#### 八十四 天使でも獣でもない (NI ANGES NI BÊTES)

「おゝ、我に勇気を」と英雄ホメロスは言いました。これは急進派の人々にとっては、その他の者を助けるために彼ら自身の最良のものを思考するのと同じ時でもあります。

権力抗争なら暴君に有利です。彼はそこで力を手に入れます。軍隊と警察と公務員と企業家と商人と野心家を、法案や法令や政令というあらゆる糸で握れば、各々の活動は擁護されます。暴君が存在するための毎日は、要塞に石を加えるためのものです。更に、暴君は毎日友人を攻撃します。毎日、敵の一人を打ち砕きます。暴君にとっては管理し支配することが、自分の明日を確かなものにするのです。暴君の行動には全てにこの痕跡があります。この昔からの支配する方法は、〈歴史〉や〈記録〉になって書かれています。

政治的に政体は権力、威光、財産、伝統というものを集めます。というのも例外なく全てのものを、小さくても大きくても、彼らの領域において同じ原則で管理するからです。この種の政体はあらゆる時が戦いです。物質的な力を命じます。道徳的な力は溶かします。肉体を救済するために魂を見失います。多少なりとも私たちは全員が服従されると耐え難い状況であり、宗教が心象や神話によって表されます。

ところで天使と悪魔を引き裂いたように〈聖人〉とか〈予言者〉は何を生むのでしょうか。それは貧しい儘でいます。出来ることなら砂漠へ逃げます。本性に従って祈るか朗読します。全てが正しいことですが、何も生みません。社会主義は、砂漠のこの〈予言者〉を大変良く表現しています。それは魂を救います。

そうでない他の者たちは自分の魂を誠実に追い立てます。伝説で語っているように、悪魔に身を売ります。嘗て許されたことがない力のゲームに加わり、その後でそれら自体の中で最良の部分には注意力を最小にすることで耳を傾けて下さい。彼らは生きること、維持すること、増大することしか考えません。右翼はこの完全な唯物論に従って生きています。ナポレオン一世の頃にはこの恐るべき団体が既に自らを改革していました。王政復古の頃も同じですし、嘗てない程強く絶望していました。ルイ・フィリップの頃も宣誓がありながら絶望していました。第二帝政は結局、権力を回復しましたが、それは政治における深いシニスムによって驚くべき成功を齎しました。これらの権力は何時法によって構成されて準備され、生きています。自分の魂をきっぱりと売り渡したことも権力の中で一つの権力になります。

急進派の人々は両者の中間にいます。天使でも獣でもありません。両方を嘲笑う人々です。一方は魂を守っているからで、他方は肉体を守っているからです。暴君とは逆の彼らが、力を弱くするのは権力によって公正に振る舞うからで、それは権力のためではなく正義のためであるからです。平凡に振る舞う者の中で能力によって高尚になるのです。何時でも悪魔に誘惑されています。手を結ぶことの危険を拒絶しますが、〈予言者〉を穏やかにするには十分ではありません。そして彼らの心の中では全てが〈予言者〉の呪いによって圧倒されていました。彼らはどっちつかずの中間の状態におり、栄光はなく、困難で、理想と現実の中間におります。彼らの魂は〈煉獄〉であり、希望と躊躇いと後悔が潜んでいます。私の兄弟だと分かりました。

(一九一二年五月二七日)

## 八十五 陪審員たち (JURÉS)

昨日、或る人が私に語ったのは、陪審員として出席した彼の親の印象でした。その印象とは別に、他の話も一緒に話してくれました。事実がそうであるように、議論も理解の光がやって来

るまでは何時も大変に遅いと私は結論を下しています。私は良識を信じています。しかし、私が大急ぎで聞き、意外な光の放射によって眩惑されて非常に疲れていても、結局は正しい結論を下すように要求される迅速な判断を私は信じています。民事裁判は一週間後に、殆ど全てが判決されることに注意して下さい。何故、陪審員の評決には時間が定められているのでしょうか。何故、あらゆる事件をゆっくりと落ち着いて自分の考えを要約したり、友人に意見を聞いたり、書類を読む時間が各々の陪審員にはないのでしょうか。最後の審議において陪審員は話すことが出来て、弁護をやり直して極端な行動を取れるとも言われています。しかし、何故やらないのでしょうか。全ては時間がないからです。

秤の分銅のように精神に働きかける証拠が何時も望まれています。最も頑健で正しい精神の持ち主がびっくりするや否や、不安や恐怖に襲われるたなら如何なる状態であっても言うてはなりません。デカルトが全ての間違った判断に与えていたのは偏見であり性急さでした。ところが大変に珍しい場合ですが偏見や先入観を持った陪審人に対しても、つまり断固たる意見を前もって抱いていることに対しても、私たちは賛成や反対の弁護をしたり証言をしたりしているように私には思えます。この上なく事態が上手く行くのは、異議を申し立てる権利が行使された後です。そして陪審人たちの心の裡は、殆ど何時もあらゆる証拠に誠意を持って心を開いていると言えます。しかし、性急さに私たちはどんな注意を払えば良いのでしょうか。何も無いように思います。逆に、解決は機械的な活動によって齎されます。弁護は望む限り、告発することもそうであるように進展して広げることが出来るのを私は良く理解しています。しかし、そこには熟考する時間が何も残されていません。その人が話せば話す程、私は鈍くなって熟考が出来ません。次のように言う弁護士くらい不条理な者はおりません、「皆さん、私には更に二時間であなた方をうんざりさせる権利があります。よろしい、私は陪審員たちが全員で討議することを除き、好きなように自由に使える二時間を彼らのために要求します」。しかし、それは決して受け入れられません。その上、二時間とは何でしょうか。討議の前には一晩の眠りが最良のものになります。それにも反論が幾つもあります。しかし、何でもあるのです。

文字通りの討議が執行と同じ速度で行われているのに、沢山の教育の期間があつたり余暇があつたりするのは奇妙ではありませんか。従って討議は二回行われます。最初は沢山の配慮をもって行われますが、本当の裁判ではそれを利用しません。というのも二週間続く教育の支援が行われていることに注意して下さい。あなた方が四時間で示す時、その結果を判断するのは不可能です。その陪審は教育に属するものになります。そこでは良識が徐々に働き、教え合うようになり、いわば新しい状態の証拠や答えを手に入れます。恐らく、その保証も満足出来るものです。一人又は三人の裁判官は、それらに規制される場合や予審の調書に沿って次々に決定することが出来ます。要するにその裁判官は、より先入観に陥りやすいのであり、迅速にやるために陪審員がいるのです。それに倣って告発があれば陪審人に委ねて、判決を出さねばなりません。

(一九一二年五月二八日)

## 八十六 社会主義者は答える (LE SOCIALISTE RÉPOND)

急進派は、右派や左派が来ても、不愉快な事実を理解するように運命づけられています。理想主義者の言葉がそこにあります。「急進派のあなた方にとって社会は一つの現実ではない。それは契約である。書類はなく、サインもないが、そんなことはどうでも良いのだ。結局のところは平和であることだ。ところが戦争には軍事力が要る。一方が遠慮なく盗み、殺しもする。しかしこれらの暴行が、もしもよりきれいに盗んだり殺したりすることを考えたなら、大したことでなくなり、気付くこともないのはまさに良くあることだ。良識に叶って養わないこと、使用されている人々でなければならない限りお金を支払わないこと、それは盗むことであり殺すことではないだろうか。ところで、それは誰が決めるのだろうか。

急進派の君よ、所有権は屢々認められないことに注意して下さい。相続人の権利と買手の権利と責任と従属には、全てが裁判の機会が与えられている。当事者の誰もが好みで決定しないことをあなたは良く分かっている。裁判官は契約を解釈し、屢々破棄して無効にさえする。その契約が公序良俗に反していれば、臆することなくそれを行う。あなたのものであるそれらの原則によって、私はあなたに我慢しているのだ。

私は公序良俗の大義のために、あなたに利益の分配を監視するように要求する。裁判官に哀れを催させるこの理性を労働者に背を向けることなく、或る場合にはそれらの労働契約を定めたり修正したり無効にすることを要求する。というのも慣習というものは集団の法ではなく、その承諾は理性に反したものを決して正当化しないからだ。住居、食料品、労働者の休息を監視し、契約の当事者の一人が不可避免的に飢えて愚かになって、子供にまで害毒を与えて、公序良俗に一致しているか、最後の決定を下すように、結局のところ私はあなたに要求する。

ところで、私はそこまでやらない。私があなたに要求するのは、何時も前もって警察隊と共に、最も主要な部分を取らぬ人々が有利にならないようにすることである。あなたが単なる傍観者であることを私は要求する。片方を援助せず、他方を潰さないことを要求する。ましてあなたなのですから。私があなたに要求するのは、あなた自身が使用者であった時、管理するあなたはいわば地位にあっては一人であり、鉄道では他人と一緒に仲間であっても、私はあなたに協調の規則を人々が適用するように要求するし、搾取するための規則ではない。あなたはそうしなければならない。あなたはそれを望んでいるし、それを約束したのだ」。

几帳面な人のその話を考えると、彼は力がない訳ではありません。右派の傾向があり、殆ど無感覚で平然としたような表情をして動かないで、急進派の人は時々深く沈思黙考する中に陥ると理解されています。幸いなのは他の党派の人々であり、彼らには〈福音書〉があるのです。

(一九一二年六月一日)

## 八十七 選挙投票 (LE VOTE)

有権者にとっては、今の社会をひっくり返して古くても新しくても良いから他の社会に作り直したいと思うのであり、選挙投票は人間よりも寧ろ思想を示していると私は理解しています。というのも反対することは重要であり、戦うことも重要であるからです。その時は規律が不可欠で、皆で否定すると自然に全てが実現して行きます。〈共和制〉に反対して襲撃した人々の全てが共通した憎悪で結びついて武器を取らせていたことを思い出して下さい。反動勢力は忽ち候補者を選出していました。狂信的な候補者です。盲目的な信者です。誰でも構わないのです。どんな武器でも構わないのです。そして、何かの反撃で押し返すことが大切で、その時私たちは良く次のようにお互いに言います、「彼らの意味は少しも重要でない。認めるか認めないかである」。その時は人民投票を行います。広く望まれている比例代表制のための連記投票が大変良く行われています。比例代表制は力の評価において厳正な正義を表しています。従って政治的になり始めるや否や、如何に単純化された制度を目指すのかは、次のとおりです。五百人の名前は二つ又は三つの名簿にしなればならず、選挙区は一つであり、一つの地方と一体です。その時からその他の名簿の人々を無視できます。私が仮定するのは三百人の共和主義者、百人の反動派、百人の社会主義者です。そして、共和党が四年間の任期を務めることになります。

ところがこの種の国民投票を支持する君主制擁護の党は、その時将来の政権を準備して、権力を強固にするために自分の権力を利用して、敗者たちを押し潰し、協同組合や新聞を圧殺して、征服の精神を呼び起こし、危険に満ちた戦争にも大胆に行動し、警察を悪用して利用し、自由も誠実さもなく将来の選挙に備え、世論を唾然とさせ、最後には人間の内面まで支配して、公務員と裁判官たちが自分たちの地方を或る意味で植民地化しているのです。

しかし、誠実な共和主義者たちがそのような権力を生むことをあなたは望みますか。彼らはそのようなものを主義から拒みます。いわば彼らだけの権力に反対します。絶えることのない内戦を容認しません。激しいこれらの争いや現実問題の解決を何ら齎さないこれらの主義の決定や戦争行為を忘れさせようとし、ドレフュス事件、税金、食料の値上げ、植民地化、同盟の問題があります。彼らはそこから受け取った権力を国民に返すことを望んでいます。全てを再び問題にします。全ての問題が世論に委ねられます。税金は別に分けられます。平和と戦争も別です。鉄道ストも別です。地方での公的生活は自然に従ってきちんとしており、それは現実的協調や妥協を可能にしています。経験が至る所で決定し、革命によるのではなく、忠告や通知や批判や抗議によって決定されます。取分け、検査は至る所で行われており、権力が強いから検査そのものも抑えられると期待するのは馬鹿げています。従って〈共和制〉は党派の精神を弱めて、良識や経験に従わなければなりません。自ら責任ある個人に代わるものは何もありませんし、彼は何

時でも判断し良く調べて明らかにして、見識ある者になるのです。公的生活はチェスをする人々の集まりではありません。もしも悪い手を指したなら、非難されるのです。

(一九一二年六月十二日)

## 八十八 信条 (DOGMEs)

現代のモロッコの政治問題について、全く単純に軍事力が行使され、話に酔い、軍隊の勢いがその他の美德に取って替えられ、サーベルで一撃を加えることが十分に道理あることであると信じられています。その政策はまるで直ぐにサーベルを下げて戦う者のものですが、多くの人々の政策は腰を落ち着けて座っているものであり、自分で納得した判断や想像力の働きによって夢見て消化するものです。「戦争は何時も起きる。勇者は何時も尊敬され、逃亡兵は軽蔑される。学校の腰掛で私がやっとの思いで翻訳した詩では、全てが同じリフレインであった。非常に驚くべき一致であり、変わることはないやり方で、それは恐らく重大な真実を表している。私は武器による勝利の酒を飲むのだ」。この感慨には大変に根強いものがあります。それは政治という彫刻家が創るものの下地の粘土になっています。

他には〈教会〉があり、戦争行為というものは罪であり、狂気であり、野蛮であり、人間が野獣に戻るものであるとのことです。首尾一貫してもう一つの頬を差し出したがっているトルストイとその弟子たちを除けば、他の信者たちは恐ろしく喧嘩好きです。彼らは戦争に反対しても、通りでの戦いに参加します。その忠告で大袈裟な演説はきっぱりと止めます。そこでは良く思考します。問題が提示されます。断定はされず、問題が提起されます。権利と力が結ばれます。それらは最早雪崩となって思考はなくなり、大変容易に次々に行われて行きます。絶対的真理です。リフレインです。詩篇です。それは最早、教会の譜面台では歌いません。

抽象的な意見がお互いに相容れないのははっきりしており、一致することはありません。力の信仰は主義です。権利の信仰も主義です。両者のうちどちらかが好かれます。そこに人は身を投じます。ずしんと腹で同意します。しかし、思考することは好まれません。それは良く調べることです。抵抗したり、お互いに関連している何かを良く調べることです。もしも思想家が、最も疑わしくないもの間で疲れることなく〈権利〉と〈力〉の二つの観念のうち一方を大切に好きになり発展させて行く代わりに、如何にして一緒に結びつけることを理解したいと思ったなら、プルドン (1) の「戦争と平和」を読むべきです。

換言するなら、決して抽象化された〈戦争〉を考えるべきではありません。それは神学です。しかし、ありの儘の戦争とか別のものを思考することは、権利と力、憎しみと博愛で出来た織物のようなもので、観念が組み合わされて結び付き、様々なものを把握させる定められた様式に従

って分配されています。ボノ (2) の捕らえたものは戦争です。モロッコの戦いはもう一つの戦争です。リビアのトリポリタニアの地域におけるイタリア人たちの事件も、更にもう一つの戦争です。フランス・ドイツ戦争も、更にもう一つの戦争です。多く並んだこれらの一連の事例は、未だ完全に済んだものではありません。でも以上は、如何に判断されているのでしょうか。思考は、単なる諂 (へつら) といか慰めになるのではなくて、改革者になるための条件です。少しは生き生きとした何らかの文字の形で、優れた友人たちに答えるためであるとも言われています。私は考えようとしません。そして、それは彼らに気に入られることではなくて、私が気に入ることなのです。

(一九一二年六月十五日)

(1) ピエール・ジョセフ・プルードン (一八〇九～六五) は、社会主義者でアナキズムの創始者である。

(2) ジュール・ジョセフ・ボノ (一八七六～一九一三) は、フランスのアナキストである。

## 八十九 信者たち (CROYANTS)

信じることは難しくありません。そして、それは大変に気持ちの良いものです。その神学者は全てに答えました。神はいるのであり、病気や死や不正や熱狂を説明することが重要です。もしも死を準備するのを少しは知っていたなら、何時もそこに行き着きます。完全にこの種の仕事が行われるのを見たいと思う者たちは、ライプニッツの『弁神論』を読むしかありません。下地の上にある思想が言えるのです。「全ては、可能な世界で最良のものの中で、最良のもののためにある」ことを私は知っています。私はこの結論を最後にしようと思ひますし、風と潮があつて難しくてもそこへ行きます。私はエスペラント主義者たちの家で、それと同じ教義の力を見ました。彼らは先ず、長い宇宙の観念があらゆる観点で絶対的に正しいと宣言しますが、如何なる種類の不都合もありません。反対論者が来るなら来なさい。彼らは疑うことがないのです。反論者に答えるために論拠だけを探しているのであり、見出すのはそれです。人は証明したいものを予め知っている時、証拠を見付けるのは困難ではありません。

比例代表制論者たちは、その種の信者たちです。彼らは、如何なる曖昧さも不確実さも疑わしさも承知しません。それらの制度は、少数派の行動や力も用意していること、一定の安定した多数派によって継続した政府の維持期間を確実にしていることを、彼らはあなたに証明することでしょう。選挙の買収行為を話して下さい。直ちに彼らがあなたに証明することは、比例代表制がそこでは救済策を齎すということです。有権者の軽率さや無知のことも話して下さい。それら

のことを聞くと、直ぐに彼らは郡選挙の投票がこれらの悪に責任があり、比例代表制が治すことになるかと教えています。支離滅裂で軽率な外交、短期の経済政策、国家施設、高い物価や訴訟費用のこと、あるいは何でも構いませんから話して下さい。直ぐに彼らは少し後ずさりして、勢いをつけて障害を跳び越えて行きます。彼らが言うことにも恐らく、一つか二つの真実はあります。でも私が見て殆ど醜悪で気に障ることは、この教条的な独断的確信、心の平安、平然と結論に向かう調教師のような安心さです。私は、大変に早く反論する者自身にも最後に論証する余裕があるかどうか心配ですし、それらを疑って欲しいのです。何でも言うためには、考える能力があることを見せることです。激昂も同じです。最も卑劣な計略を彼らの敵に帰するのが自然なこの策略は、私にとっては悪徳を導く証拠であり、神学上で発展していくものです。要するに、これらの教義の合鍵は、私が思想と言うものと何も似ていません。私が経験を積んだ限りにおいて、思想は新たな困難によってしか解決というものを決して齎してくれません。それは熟考する働きを決して終わりにしません。寧ろ、始まりです。例えばルソーの『社会契約論』の思想は、微妙な思考の道を幾つも開けています。『資本論』のカール・マルクスの思想も同じです。懐疑は思想と共に始まります。この反省によって思想は別のものを生み出します。驢馬は牧草地や通りや小屋にいないで、いとおんと何時も鳴いています。愚かな驢馬はそこから決して出発しません。

(一九一二年七月十八日)

## 九十 信仰について (SUR LA CROYANCE)

信仰について言うべきことがあります。考えすぎることなく、私は説教に反対する説教を多く行います。そして、私は天国とか地獄とかを探しに行かないことを良く見て下さい。徹底して肯定する人々に対して否定する人々は弱く、殆ど手掛かりもないのは大変に明白です。まるで私は、そこからやって来た何者かと中国を争わせたがっているようです。しかし私は、彼に反対する如何なる理由がない時でも、彼が言うことを全て信じる訳にはいきません。私には、私の意見を取締まる義務があります。

私は、耳にしたことを全て繰返して言います。蓄音機のような私は、同じ順番で言葉を表現します。力と一緒に迷うことや変わることもなくそのことが繰返され、私が若かった時に聞いたことであっても、意志が取締りの機能を行使しない時であっても、それでもそれは私なのです。取分け、もしも生き生きとした感情から感激して議論に加わったなら、それは恐怖であり、苦痛です。というのも、これらの激しい動きはより深い跡を打ち込み、記憶に嵌め込み、そして最後には純真な人々を明らかにするとされています。

私が小さかった時、男の子が訳もなく強く私をぶちました。私は、顔と物腰と着ている服からそのことを思い出し、その男性と会いました。私はその男性を信用しません。この連隊の馬たちが、軍服を後ろ脚で蹴ったり噛んだりするようなものです。そこにある信仰には根拠がありませんが、大変に根強いものです。それは信じる機械です。信じる動物です。そして他にはどんなものが作られるのでしょうか。花束、本の装丁、色彩、音、形式の類似したものが私を動かすことを可能にします。その秘密は私という機械の中にあるのであって、それらの中にはありません。もしも私が大変に小さな時に西洋南瓜で消化不良にでもなったなら、少なくとも西洋南瓜を見れば吐き気を催すことになるでしょう。本の中では戦う人間や大変勇敢な人間が引き合いに出されますが、私は下着に刺さった一本のピンを見て震えますし、恐らく乳母の不注意が子供というものにピンを刺しているのです。ところで、確かに疑い深くなくなって記憶というメカニズムが十分に解明されるや否や、そこには信者たちがおります。「如何にして西洋南瓜が好きになり得るのでしょうか」と或る人が言います。そして、もう一人が言います、「私はピンで殺されます」。彼は決して自然な活動に沿った考えを基礎に置いているような人間に値しないと私は言います。私は自然の活動をその儘形成させて行きます。十分にそうすべきです。しかし、真実の代わりに私はそれらを手に取りません。

よろしい。でも私は証拠もなく信じる場合もありますし、主任司祭が私に期待するのもその時です。人間は、熱狂、動物的思考、戦争、怒りそしてアルコール中毒に反対して何かが出来、と私は信じています。しかしそれは、もう一つの異なった信仰のようなものであると理解して下さい。というのも経験はぴったりくっついて行くからです。従ってここで証拠のことをつけ加える人は、決して自然ではありません。それは人間の意志なのです。私は信じなければなりませんし、信じたいのです。何故なら私は行わなければならないからです。そして先ず考えることは、最初の間違いです。「私は自分でそれに反対しなければなりません、何も出来ません」。そして、それは信仰ではなく、信頼とか確信であると言わなければなりません。私はそれが〈正義〉であると信じています。何故ならそれが公正であるからです。その意味で私には宗教があります。しかし、私は神を判断します。その様にして信仰は生まれ、思想から行動へ行きます。従って正義は決して盲目でいたいとは思いません。私の手には武器があり、そしてイエズス会修道士を待っています。

(一九一二年六月二四日)

(次号へ続く)

一ノルマンディー人のプロポIV  
【2013年11月号】

<http://p.booklog.jp/book/77780>

著者：アラン （翻訳：高村昌憲）

翻訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/77780>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/77780>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ